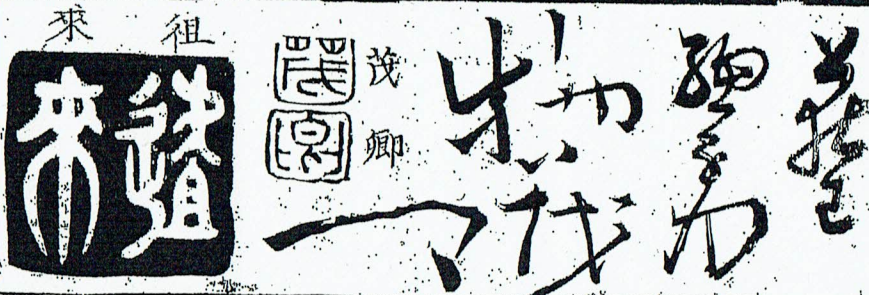


荻生徂徠

國學院大學文学部教授 石本道明

荻生徂徠肖像



おぎゅうそらい 『荻生徂徠』 一六六一—一七六。江戸時

代、江戸の人。名は双松(ふたまつ)。字は茂卿。幼名は伝二郎。通称は総右衛門。号は徂徠。また日本橋の茅場(ちやば)町にいたところから護園(ごゑん)と号し、先祖の物部(ものべ)氏にちなんで中国風に物徂徠・物茂卿(ものもけ)と称した。館林(たてばやし)藩の医官方庵の次男で、江戸芝浦に生まれた。延宝七年(一六七五)、父方庵が藩主綱吉(のち五代將軍となる)の讒を蒙って上総国(千葉県)長柄郡本納村に貶謫されたので、これに従ったが、元禄三年(一六八八)父が赦されて江戸に還るに及び、芝に塾を開いて朱子学を講じた。当時貧乏で衣食に窮し、増上寺前の豆腐屋に助けられたという話が伝えられている。元禄九年(一六九四)三十一歳のとき柳沢吉保(五代將軍綱吉の執権)に見出されてのちは、綱吉にも謁見して名を成した。宝永六年(一七五五)、綱吉の没後は退いて教授し、門人に太宰春台・服部南郭・山県周南などが出て、いわゆる護園学派を形成した。初め朱子学を奉じたが、のち復古に転じて朱子学を攻撃し、また伊藤仁斎の古義学をも駁して対立し、別に古文辞学を起こ

した。古文辞は明の中ごろ、李于麟・王世貞によって

説き始められたもので、漢以前の古文こそ真の文章で

あるとしたが、徂徠はこれによって経書もまた直接古

言古語を研究することにより、その真義が得られると

した。なお、詩文においても古文辞をとえ、特に詩

は唐詩選を尊んで宋詩を排斥し、明詩を鼓吹したが、

詩文の制作を奨励して、朱子学の道学的文学論に対し、

詩文を道德の拘束から解放する立場をとった。また岡

島冠山を講師として中国語の学習会を開くなど、中国

語の習得に力を入れ、みずからも通じた。寛文六年二

月十六日生、享保十三年一月十九日没。年六十三。著

大内熊耳 立原翠軒

○太宰春台 五味釜川

○服部南郭 湯浅常山

○荻生徂徠 鵜殿本庄

○山県周南 戸崎淡淵

○平野金華 亀井南冥

○山県周南 宇野明霞

原念齋（一七七四～一八二〇）『先哲叢談』＋『先哲像傳』

○徂徠荻生氏、本姓は物部なり。名は雙松、字（あざな）は茂卿といふ。通称惣右衛門、徂徠と号し、又護園、赤城翁とも号す。

……父を方庵といひ、憲廟（常憲公 五代將軍綱吉）の侍医なりし。徂徠 寛文六年（一六六六）に生れ、五歳にして能く字を識り、十四歳の時、父方庵事に坐して、南総（千葉県茂原市）に竄（さん…流罪）せらる。徂徠従ひて移る。然れども僻地にありて、苦学し、十五歳の頃より文を属（つづ）り、二十五歳の時、赦に値ひて、江戸に歸るを得たり。

遂に大儒となり、甲斐侯（柳沢吉保）に聘せられ、祿五百石を賜はり、編修総裁となり、後大城（江戸城）にも屢々（しばしば）めされしとなり。我が邦 慶元（慶長・元和…徳川幕府創立）以来の儒風ことに於て一変し、復古の学を唱へて、一時を風靡す。文章は李王（明の李攀竜・王世貞）の修辞を宗とす。

英才多く其の門に輻湊（全国から集まる）して、其の学風を補翼す。太宰春臺・服部南郭をはじめ、その他（安藤）東野・（山県）周南、（平野）金華・（宇佐美）澗水（しんすい）数ふるに暇なし。徂徠 才学共に富みて、尤（もっと）も経済に長じ、また雅楽（古楽）・象胥（しょうしよ…将棋）・訳官（中国語）・軍旅（兵法）・法律、すべて百家のこと精覈（せいかく…調べ上げる）せざるなし。然れども好奇の癖ありて、後世誹譏（ひき…非難）するものまた多し。実に東方の一偉人なり。

享保十三年（一七二八）正月十九日卒（しゅつ…逝去）す。年六十三。箕田（港区三田）長松寺に葬る。法諡（ほうし…戒名）を清淨院根與知専居士といふ。

学問の方法 明の李于鱗・王世貞↓古文辞…「文は秦漢、詩は盛唐」 Ⅱ 詩文の作り方

徂徠↓古文辞学…古言を以て古言を解す↓中国語で読む

影響 經学…古典解釈全般に及ぶ↓日本発のオリジナルの学問

兵学…近日、儒士の武を談ずるは物茂卿一人のみ

医学…古医方

棋局…広象棋 百八十駒の将棋を発明

○初め芝街に卜居す、時に一貧洗ふが如く、舌耕（講義）殆ど衣食に給せず、増上寺の前に腐家（豆腐屋）あり、徂徠が貧にして志あるを憐み、日に腐渣（ふさ…おから）を饋（おく）る、後禄を食むに及び、月に米三斗を贈りて之に報ず。
↓講談・落語の「徂徠豆腐」

○徂徠嘗て庫（くら）一の書物を払ふものありしを、金六拾両程家財を売払ひ買はれしとなり。

○徂徠の書を見る、暮に向へば出でて簷際（えんさい…縁側）に就き、簷際も亦字を辨ずべからざれば、入りて齋中（室内）の燈火に對す、故に旦より深夜に及ぶまで、手に卷を积くの時なし、其の平生分陰（時間）を惜しむもの、率ね此類なり。南郭某歳元日、徂徠を訪ふ、徂徠方に几に隱（よ）りて孫子を閲（けみ）す、面垢つきて洗はず、髪亂れて梳（くしけづ）らず、新年を知らざるものゝ如し、乃ち呶々（どど）兵を談じて置かず、南郭竟（つひ）に新禧（新年）を祝するを得ず。

○大岡忠相（越前守）曰く「聞く、徂徠が博識洽聞（こうぶん）知らざるなしと、試みに問ひて以て其答を蹟（くじ）かしめん」と。乃ち招きて問ひて曰く「世に鼠婚（ネズミの嫁入り）の説あり、何の謂ぞや」と。徂徠答へて曰く「事某年某人著す所の小説に出づ」と。乃ち著書載する所の鼠類の眷属（けんぞく；親類）名姓、口に矢（つら）ねて縷々（るる）注ぐが如し、忠相始めて其の強記に服す。

○書商小林新兵衛 徂徠に謂ひて曰く「小子家号なし、願くは命（名づけ）よ」と。徂徠笑ひて曰く「書賈の吾門に出入するもの五人、而して爾（なんじ）が鬻（ひさ）ぐ所 価最も高し。猶ほ嵩山（すうざん…高峰）の五岳に於けるが如し。宜しく嵩山房と名づくべし」と。

○或るひと徂徠に問ひて曰く「先生講学の外、何をか好む」と。曰く「他の嗜玩（しがん…好み）なし、唯だ炒豆を嚙んで、宇宙間の人物を詆毀（ていき…非難）するのみ」と。

○徂徠毎（つね）に自ら言ふ「熊澤（蕃山）の智、伊藤（仁齋）の行、之に加ふるに我学を以てせば、即ち東海始めて聖人を出ださん」と。

○『紫芝園漫筆』（太宰春臺著）に曰く、「徂徠先生甚だ生を重んず、飲食居処より以て出入動止、賓客応接の事に至るまで、苟（いやしく）も以て生を傷（きづつ）くべきものは断じて為さず、然も其の病死せる所以（ゆえん）は思慮（考察）度に過ぐるを以てなり。

蓋（けだし）し先生功名に志あり。少より著述を以て事となす。年六十を過ぎ、旧疾数々発して猶ほ清心静養する能はず。遂に篤疾（重病）を致して死す。謝在抗云く、思慮の人を害するは酒色より甚しと、誠に然り」と。

太宰

純

太宰純印

純

水壺秋月



太宰春臺肖像



だざいしゅんだい 『太宰春臺』 一六〇一—一七四七。江戸時代、信州（長野県）飯田の人。名は純。幼名は千之助。字は徳夫。通称は弥左（右）衛門。号は春臺、また紫芝園。本姓は平手氏。姻族太宰氏の嗣となった。

初め父に従って江戸に出て、中野撫謙に程朱の学を学んだ。出石侯に仕えたが、病氣となって退き、京都に出て流浪すること十年、同門の安藤東野に勧められて旧学を捨てて荻生徂徠の門に入り、古学を研究した。

太宰春臺（経学 知行厳格の人）

徂徠の没後はその学を継承して名が挙がったが、晩年にはやや徂徠の説に服しないところがあり、詩文においては李王の古文辞を斥けた。博学で、天文・律暦・字学・音韻などにも通じ、とりわけ心を経済の学に留めた。性は剛毅狷介で、みずから高く構え、直言して憚るところがなかった。延宝八年九月十四日生、延享四年五月三十一日没、年六十八。著に論語古訓十巻・

○春臺太宰氏、名は純、字は徳夫、俗称彌右衛門と云ふ。春臺と号し、また紫芝園（ししえん）

とも号す。信州飯田（長野県飯田市）の人にて、平手政秀の後なり。父の時より太宰氏となる。

延宝八年（一六八〇）に生れ、幼き時父に随ひ、江戸に移る。

……後、徂徠復古の学を唱ふるに及びて、就て業を受け、遂に其の説を主張す。晩年やゝ一家の見識もて、徂徠の右に出る事あり。始終経学をもて任とし、礼法をもて教ふ。

初め或る二侯に仕へ、意を得ずして致仕す。……処士（ろうにん）をもて門戸を開く。延享四

年（一七四七）五月晦日卒す。年六十八。江戸谷中（台東区）天眼寺に葬る。

○春臺は物を極むる事好きなり。人と会釈にも、初めて逢ひし時より、是は此の位の会釈にすべき人といふ格を定め置かれしとぞ。

○菅麟嶼（山田 麟嶼…りんしよ）幼にして才氣煥発す。年十三、擢んでられて大府の儒官に列す、一時称して奇童子（神童）となす、然るに卒（つひ）に苗にして秀でず。…

純が足下を識りてより以来 茲（ここ）に数年、未だ足下が誦する所あるを聞かず。今日を以て前年に較ぶるに、亦未だ其進む所あるを見ず。而して進む所のものは吹笛（すいてき）のみ、近來声価頗る減ずる、豈に徒に然らんや。程正叔に言あり、曰く「人に三不幸あり、少年にして高科に登るも一不幸なりと、足下夫れ之を思へ」と。

↓程伊川（いせん）

人に三不幸あり。少年にして高科に登る、一不幸なり。父兄の勢に席（よ）つて美官となる、二不幸なり。高才有つて文章を能（よ）くす、三不幸なり。

○春臺善く笛を吹く、此時に當り、東叡法王 音律を好む、春臺が音に妙なるを聞き、嘗て使をして之を召さしむ、春臺辞して曰く、余は儒生なり、若し儒を以て召さるれば則ち駕を待たず、其の私嗜する末技を以て、王門の伶人（樂師）となるは余欲せざるなり」と。是より終に復た笛を吹かず。

○赤穂の党 吉良氏を刺すや、春臺口を極めて之を醜詆（しゅうてい…ののしる）し、併せて（室）鳩巢が『義人録』を作るを駁（ばく…反論）して曰く「室氏にして『義』を知らざることを此の如し」と。

服部南郭肖像



はっとりなんかく 『服部南郭』 一六三二—一七〇五。江戸時代、京都の人。儒者で漢詩人。名は元喬。字は子遷。通称は小右衛門。号は南郭・芙蕖館・周雪・観翁。十六歳のとき、柳沢吉保侯に仕え、壮年に及んで江戸に出て、荻生徂徠について古文辞を学んだ。詩文に兼ね服部南郭（風流文人のモデル）

長じて文名が一時に上がり、太宰春台などと名を齊しくした。また画を善くし、好んで和歌を詠じた。三十四歳致仕して後は来学する者が多く、晩年肥後侯の賓師となった。唐詩選を尊重して、その唐詩選の解（唐詩選国字解七卷）は唐詩選の流行に大きな力となった。天和三年生、宝暦九年六月二十一日没、年七十七。東京品川の東海寺（臨済宗大徳寺派）に墓がある。著に

○南郭服部氏、名は元喬、字は子遷、俗称は小右衛門と云ふ。南郭と号す。又不忍池の辺に住みてより、芙蕖（蓮の花）館とも号す。……

天和三年（一六八三）京師（京都）に生れ、年十四にして江戸に來り、十六にして柳澤侯（吉保）に仕へ、絵事と和歌をもて出づるとなり。三十四の時致仕す。是より儒をもて生理（暮らし）をなす。

徂徠に學びて、古文辞を修し殊に詩に長ず。門人の束脩（そくしゅう…授業料）、およそ年分に金百五十兩余に及ぶとぞ。其の盛んなるたぐひなし。

徂徠歿して後は、経義は太宰春臺を推し、詩文は南郭を称す。自らも又肯て講説を事とせず、また経済を言はず、独り詩文にのがれ、雅致をもて生涯とす。嘗て『唐詩選』を校刻して、作家の模範をひらき、折に触れては、絵の事を楽しみとし、宝暦九年（一七五九）卒す。年七十七。品川東海寺中、少林寺に葬る。

○「南郭は謝安（三二〇年～三八五年）東晋の文人・政治家」に似たる人にて、喜怒色にあらはさず、人に構はず、我がもの好を立てられし人なり。」と高子式（高野蘭亭）の評なり。又「近來の学者皆酒量あり。仁齋のみ下戸、東涯も上戸、闇齋、淺見（綱齋）も上戸、徂徠は下戸、南郭・春臺上戸なり。」と、松君脩（しょうくんしゅう）（松崎観海）云はれたりと。

詩家・文章家↓天才流麗、眞に古人に配するに足る。『唐詩選』の大流行

山縣周南肖像



やまがたしゅうなん『山県周南』江戸時代、周防（山口県）の人。名は孝揺。字は次公。通称は少助。号は周南。萩藩の儒官山県良斎の次男。幼少のとき父から家学を受け、刻苦勉強した。十歳、江戸に出て荻生徂徠に師事し、従学すること三年、萩藩に仕えて元文一一年藩校明倫館の学頭祭酒となった。門下に俊才が輩出した。その学は徂徠学を遵守し、経術・文章をもって宗とし、文は秦漢、詩は唐明の風に帰した。宝暦二年八月十二日没、年六十六。

※ 明治書院『日本漢文学大事典』近藤春雄著 昭和六〇年初版 平成六年五刷

○周南山縣氏、名は孝孺、字は次公、俗称は少助と云ふ。周防の南鄙（山口県防府市）に生る。よりて周南と号す。……周南は貞享四年（一六八七）に生れ、母は松村氏にて、第二子なりし。兄歿するをもて嗣となる。幼より穎敏（えいびん…優秀）常児に異なる。殊に父良齋、周南を教諭して箕裘（ききゅう…家業）の業を続がしめんを欲し、毎日書を樓上に登せ、誦誦せしむ。その間は梯子を去りて下る事を許さず。

年十九のとき携へて江戸に來り、徂徠に師事せしむ。……其の頃徂徠の学業いまだ大いに振はず。たゞ（安藤）東野・周南の二子のみ、互に羽翼となりて、是を輔く。故をもて後に徂徠大家を成すに至りても、二子をあつかふこと群弟子に異れりと。

周南 国に歸り、韓使（朝鮮通信使）李東郭・洪鏡湖等の学士來聘することあり。筆語唱酬して大いに国光を觀（しめ）すとぞ。又国学（藩校）明倫館の学規等を議し、祭酒（学長）となる。

後病に臥す事前後八年、宝暦二年（一七五二）八月十二日卒す。年六十六。府城の北古萩里（山口県萩市北古萩町）保福寺に葬る。

平野金華肖像



ひらのきんか 『平野金華』 二六八—二七三。江戸時代、陸奥（青森県）の人。名は玄沖（玄中）。字は子和平。通称は源右衛門。号は金華。初め江戸に出て医を学んだが、のち萩生徂徠に師事して古文辞学を修めた。徂

平野金華（狂を好む奇人）

徂徠門下の偉才で、太宰春台・服部南郭・安藤東野・山県周南・高野蘭亭・宇佐美淵水に徂徠と金華を加えて護国八子と称せられた。中でも金華は南郭と並んで詩文に長じた。人となり豪放磊落、滑稽にして諧謔を好み、義気に富んでいた。守山藩に仕えて優遇を受け、門人に戸崎允明がある。享保十七年七月二十三日没、年四十五。

○金華平野氏、名は玄沖、字は子和平（しか）、俗称は源右衛門といふ。金華と号せしは、もと東奥の人ゆゑ、金華山を表徳せるなり。元禄元年（一六八八）に生れ、幼にして孤となる。才鋒人に勝れ、初め東都（江戸）に來り、医を學びしが、素より其の志にあらず。後に徂徠に見ゆるに及びて、忽ち刀圭（医業）を擲（投げ打）ちて、儒生となり、修辭復古ををさむ。其の人となり豪飲を好み、劉伯倫（東晋の政治家。酒豪の第一）のごとく、家産是が為に乏しけれども、聊意とせず、頗る任侠の義氣ありしとぞ。……後に守山侯の記室となり、享保十七年（一七三二）七月二十三日卒す。年四十五。駒籠蓮光寺（東京都文京区向丘）に葬る。私諡して文莊先生といふ。

○金華は尤も奇を好む人にて、……又猫を好みて十八疋ありしとぞ。又妻の衣服を着して君に見え佳節の賀を述べしことありしとぞ。実に世を傲弄（ごうろう…からかう）する一奇人なり。されば南郭の送る序にも、「子和は東奥の一奇士なり」といひ、また「滑稽窮まらず。人々之を屈すること能はず。」などいへり。春臺の送る序にも、「子和は狂生なり。又助くるに酒を以てす」など見えたり。

○金華「早發深川（早（つと）に深川を發す）」の詩に、

月落人烟曙色分 月落ちて 人烟曙色分
長橋一半限星文 長橋一半 星文を限る

連天忽下深川水 天に連なり忽ち下る深川の水 直向總州為白雲 直に向かふ總州白雲と為る

徂徠自ら、此の詩ならびに南郭の「墨水を下る」詩、蘭亭の「又江（さこう）に泛ぶ」詩と三首を写し、壁に貼して、「鏘然（そうぜん）たる玉振の聲、得易からざるものなり」と称せしとぞ。

徂徠門人の総評

原田東岳嘗て諸子を評して云ふ。「徂徠・（伊藤）東涯（仁齋長男）二先生は匹なり。然れども徂徠は堂にあり。東涯は室にあり。これその別なり。南郭・春臺二子は匹なり。しかれども南郭は戸にあり。春臺は門にあり。（伊藤）蘭嶠（仁齋五男）・周南は匹なり。然れどもみな廊廡の下にあり。（平野）金華・（宇野）士新（明霞）二子は匹なり。しかれども皆門牆を望んで其の中に入ることはず。宇氏最劣等なり。其の才の適當、大抵此の如し。」と『筆疇』（ひつちゅう…原田東岳著）に見ゆ。優劣はしらず、何れも称首（俊才）たる事見るべし。